

日本学術会議 基礎医学委員会 神経科学分科会（第26期・第3回）

議事録

開催日時： 2025年7月26日（土）13時10分—14時30分

開催場所： 朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター展示控室およびオンライン会議

出席者（敬称略・順不同）：

現地：伊佐正、入來篤史、榎本和生、大隅典子、岡本仁、上口裕之、上川内あづさ、
久保郁、坂内博子、藤山文乃、宮川剛、柚崎通介、吉村由美子

オンライン：池田和隆、今水寛、大木研一、菊水健史

欠席者：岡部繁男、河崎洋志、後藤由季子、銅谷賢治、平田たつみ、宮田麻理子、渡
辺雅彦

懇談事項：

1. 脳研究倫理の見解（第25期）について

現行案について伊佐委員より資料を用いて説明が行われた。今後、分野別委員会の承認、第二部全体での審査など複数のプロセスが残っており、引き続き改訂を進める旨が報告された。

2. 研究力強化について — 主にキャリアプランと雇い止め問題について

研究力強化の基盤である雇い止め問題・キャリアパス問題について、日本学術会議「我が国の学術の発展・研究力強化に関する検討委員会（林 隆之委員長・柚崎委員）」及び科学者委員会 研究評価分科会（尾崎紀夫委員長・柚崎幹事）に対して、本分科会でのこれまでの意見を反映させ、検討が進んでいることについて柚崎委員長より資料を用いて報告された。

本分科会でさらに議論された点は以下の通りである。

（1）課題を提起するだけでなく、解決に向けた施策を実現することが重要である。

（2）大学院教育について、①②の観点から意見交換を行った。

① 博士号の価値

研究力強化のためには、博士研究者の育成を拡充する必要があるが、博士号取得者の安定した労働環境を確保することも喫緊の課題である。越境研究員制度の活用な

どを通じて、アカデミア以外の分野でも活躍できる人材を輩出することが重要である。そのためには博士課程進学者を増やすのみでなく、真のトランスファラブルスキルの育成を担当できる教員の確保が必要である。関連する話題として、産業界・政府機関における博士号取得者のキャリアアップ事例についても紹介された。

② 外国人への大学院教育

日本の研究力強化さらには地球規模での人材育成という観点から、外国人への大学院教育を拡充することも大切である。ただし、外国人比率等の数値目標は不要である、出身国が偏らない工夫が必要である、という意見も表明された。

(3) 間接経費の増額

間接経費が増額になれば雇用問題等に対処できる可能性はあるが、そのことで直接経費が圧迫されてしまつては研究力を強化できない。従つて、直接経費や運営費交付金を圧迫しない形で、純増をお願いしていくことが重要、という意見も表明された。

3. グランドビジョンの update について

日本神経科学学会の将来計画委員会が中心となつて昨年度に提出したグランドビジョン（脳天文台構想）を改訂し、日本神経科学学会および日本脳科学関連学会連合から提出し、さらにロードマップに収載を目指す方針が柚崎委員長より提案された。本分科会にて委員より表明された意見は以下の通りである。

(1) 過去の「国際脳科学ステーション」構想との連続性に言及すべきである。

(2) 拠点を設置する必要がある。共同利用という観点からは、生理学研究所が拠点の候補となる。

(3) 共同利用の自動化・リモート化を推進できると良い。

(4) 脳科学の関連分野（バイオリソース・イメージング・データベース・AI 関連）にも参画いただきたい。

(5) 今後は、異なる施設の複数のデータベース間での互換性を高めるために、共通のフォーマットでデータベースを作成することが望ましい。

(6) プロジェクト終了後のデータベース維持管理の責任の所在を、財源の問題も含めて整理しておくことが望ましい。

(7) 本分科会翌日のランチョン大討論会での意見と、今後実施する予定の神経科学の研究者へのアンケートを参考に、本構想を改訂していく。